ラウンドテーブルⅠ

学生が主体的に取り組む教育活動を目指して
—プロジェクトワーク型活動のすすめ—

大橋眞[1)]、坂田浩[2)]、Gehrtz 三隅友子[3)]
1）徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
2）徳島大学国際センター
3）徳島大学国際センター

＜趣旨＞

大学において教育活動を進める上で、教育に対する観点が変化していることそしてにまさに我々自身が変革を求められて久しい。それは、1980 年代の「教師がどのように教えるか」から「学習者がどのように学んでいるか」へと移ったこと、さらに 20 世紀初頭の行動主義心理学に始まる「学習理論」から様々な「教授法」が生み出され、それらが今も大きな影響力を持っていることである。その後の認知心理学では、コンピューターサイエンスの情報処理理論から、学習の人工知能研究へと進む。が一方の「学習理論」に基づく教育現場ではやはり「教え込み型の教育」が中心に据えられてきた。「教え込み型」を批判するのではなく、今現在の社会が要求する学習の成果が、教師から「曖昧性のない正しい知識」を獲得しそれを使えるようになることではないことも理解しつつ、ではこれからの教育に何が必要なのかを３名の立場から実践を踏まえた提案をもとに考える場にしたい。

＜本ラウンドテーブルの予定＞

１）日本人学生と留学生が共に学ぶ、協同学習の場を設定したもの
２）英語を自ら学ぶという自律学習の取り組み
３）留学生が地域を舞台として日本語及び日本文化を学ぶ活動
さらに４）１）の受講者である学生からの学習過程及び成果の報告

キーワード：国際化、協同学習、自律学習、社会構成主義、動機づけ、言語学習

１. 学生が企画する国際交流イベント

（大橋眞）

主体的に学ぶ姿勢を身につけることを始め、グローバル化に対応できる人材の育成は、大学教育の重要な課題となっている。これまでの大学教育では、学生が留学生と交流する機会が限られていた。大学の国際化を推進するためには、教育の中において日本人学生と留学生が、共に学びあう場を設けていく必要があろう。今回の取組は、学生の主体性を尊重しながら、学生と留学生の主体的な活動としての国際交流を進めていくために、授業の学びを、課外活動において実践することを目指している。また、課外活動においては、学生と留学生がグループをつくって、自主的に国際交流イベントを企画、実践そして、振り返りにより活動の改善プログラムを作成する。一連の活動を通じて、学生と留学生が自主的に学習グループをつくり、学生と留学生の自主性とグローバルな視点を獲得するための学びを実現していく。

・「異文化交流から何を学ぶのか」の課題

留学生とペアで「徳島の癒し空間」を探す。癒し空間の意味を留学生と議論しながら、短い文章に表現する。また、留学生の選んだ「徳島の癒し空間」について議論をして、留学生の日本語表現を必要に応じてアドバイスする。展示会イベントや課外活動のイベントなどの振り返りを行う。

上記の作品についての展示会や発表会などのイベントを企画・実行する。また、留学生と学生

がグループをつくって、自主的なイベントを企画・運営する。

２．継続的自律英語学習を目指した英語教育

（坂田浩）

日本人が実用的な英語力を身につけるには、約3000 時間の「指導」（Guided Learning） が必要であると言われている。しかしながら、現状における日本の英語教育を見る限り、学校教育で提供される授業時間数は、小・中・高・大（２年生まで）を 含めて、約 800 時間程度であり、残りの約 2200 時間におよぶ学習は基本的には学習者の手にゆだねられている。確かに、塾や宿題などでかなりの時間を英 語学習に割いているものと思われるが、決して 2200 時間という膨大な学習時間をカバーする程ではなく、通塾率が中学校３年次以降一挙に減少することを考えれば、英語学習に必要とされるかなりの時間数が依然として学習者の手にゆだねられているものと考えられる。ここ最近、文部科学省は「学習時間の増加」を声高に主張するようになってきているようだが、これは決して義務教育や高校に限ったことではない。本学における授業外英語学習時間は、「週 30 分以内」という学習者が 60%以上となっており、高等教育においても自律学習は大きな課題となっている。

現在、発表者（坂田）が行っている英語授業は、「学習方略の形成を通じて、長期的視点から学習者の英語学習を支援する」ものであり、全国的に見ても非常に珍 しい実践である。同実践においてはセルフコーチングのコンセプトに基づき、

（１）将来の自分を考える、
（２）目標を立てる、
（３）計画を立てる、
（４）実践する、
（５）評価・修正する、

という５つのステップで英語学習を長期的視点から実践するための枠組みを学習するようにしている。

今回の発表では、上記実践の概略および将来的な構想について述べたいと考えている。

３．留学生によるプロジェクトワーク

（Gehrtz 三隅友子）

コミュニケーションを重視した学習活動としてプロジェクトワークは言語教育において実践され、また多くの報告がなされている。発表者の三隅は 1990 年代初めにプロジェクトワークを学び、その手法を使って本学でも実践を重ねてきた。実践を進める中で、学習者、教育空間、教材、同僚教師との関わり、広く地域とのつながり、さらに自身の教育観の見直しという過程の中にいることを実感している。

プロジェクトワークは、「学習者がグループでプロジェクトを計画し、その計画を遂行していく過程で目標言語をできるだけ多く使用することで、目標言語の習得と定着を図る学習活動である。」すなわち教師が知っている内容知識が教師から学習者へと注入される活動ではなく、現実の様々な活動に即したタスク（課題達成の）活動が行われる。いずれにしても、①教室と現実の生活をつなぐ②学習者がより主体的になる③体験的な異文化接触を起こす活動である。

本発表では、プロジェクトワークを概説するとともに、日本事情Ⅲ及びⅣで実施している「日本人への提言」プロジェクトを報告する。本授業では学習者自身が①学習の目標と方法を確認する②様々なものを日本語学習のリソースとする③生活の中で必要な運用力を認識し、自ら日本人へ働きかけるの三点を重視している。また特に徳島という地域とのつながりについても考察したい。

４．学生からの報告と話し合い

以上三事例は「学生が主体的に取り組む教育活動」を目指して実践しているものである。さらに今回は、2012 年後期の「異文化交流から何を学ぶのか」の受講学生から課題遂行の過程及び成果物の報告を予定している。

また参加学生から、三つの活動内容と設定者である教師に対してのコメントをもらい、それぞれの活動を考えたい。参加者（教師と学習者）がともに、これからの大学教育について話すことを目的とする。